

演奏者と学校との双方向的な活動に着目した

スクールコンサートの事例

加納 暁子（芸術表現講座）

1. はじめに

近年、プロの演奏家やオーケストラ、音楽大学においてアウトリーチ活動は大変盛んになっていると思われる。報告書も多数あり、コンサートホール以外での様々な場所において気軽に音楽が楽しめる機会が増えたことは、とても望ましいことであると思う。しかし、数多く開かれているアウトリーチ活動のすべてが、何らかの基準で評価されたり、高水準を保っているとは言い切れない。中には、内容の難しい曲を一方向的に聴かされて、子どもたちが退屈しているアウトリーチ活動もみられる。そこで、アウトリーチの様々な実践例を検証し、そこからアイデアを得て、より魅力のあるアウトリーチを実践していくことはとても重要であると考え。アウトリーチの語源は「手をのばすこと、地域社会への奉仕活動」¹⁾ということであるが、本報告ではコンサートのアイデアと共に、音楽を提供するだけでなく、提供される聴衆からも何らかの発信を行うという双方向的な活動の観点から、筆者が地元で行っているスクールコンサートについて紹介したいと思う。そして、スクールコンサートを契機として、双方向的な交流活動へと発展していった事例についても紹介したい。

本報告では、筆者が演奏者として参加したスクールコンサートの事例を2校紹介する。1校目は離島の新上五島町立仲知（ちゅうち）小学校の事例、2校目は時津町立時津北小学校の事例を挙げる。2校共、双方向的な活動を視点としながら検証を進めていく。

2. 実践事例

① 仲知小学校の事例

上五島の北端にある仲知小学校は、全校児童が10名ほどの小規模な学校であり、2010年で閉校となり、現在子どもたちはスクールバスで別の小学校へ通っている。同小学校へは2009年に、ながさき音楽祭の一イベントとして初めて訪問してスクールコンサートを行ったが、2010年に海フェスタ²⁾が長崎県で開催されることとなり、その財源を利用し、なおかつ閉校記念行事として再度、同校を訪れた。演奏メンバーはピアノが2名、ヴァイオリン、クラリネット（4名とも長崎大学の教員）、ファゴット（長崎大学の卒業生）、ソプラノ（長崎大学学部生）である。プログラムは以下のとおりである。

オープニング

チャコの海岸物語（サザン・オールスターズ）

海ものがたり

うみのそこにはあおいうち（湯山昭）

海を贈ろう（田中正史）

うみ（文部省唱歌）

スタジオジブリに描かれた海

海の見える街（魔女の宅急便）

マルコとジーナのテーマ（紅の豚）

崖上のポニョ（崖上のポニョ）

夏，海辺のハーモニー

サマータイム（ガーシュイン）

情熱大陸（葉加瀬太郎）

休憩

夏を涼しく

おぼけ屋敷のロックンロール（越部信義）

お化けなんていないさ（峰陽）

アイスクリームのうた（服部公一）

大人の海，親父の海

君といつまでも（加山雄三）

兄弟船（船村徹）

真夏の果実（サザン・オールスターズ）

一緒に歌いましょう

公園にいきましょう（坂田修）

さんぽ（となりのトトロ）

発表！仲知小の皆さんの詩が歌になりました

仲知の波

フィナーレ

海の底から（山本直純）

オープニングから全体を通して、このコンサートは「海フェスタ」の一環であるので、「海」や「夏」をテーマにした曲の構成である。特に、文部省唱歌の「うみ」は小学1年生でも知っている曲であり、少し編曲された美しい伴奏を聴かせると、いつものCDでの伴奏とは異なり新鮮なイメージを持つようである。

スタジオジブリは、どの学校で演奏しても大人気の曲である。今回は海と関連の深い作品の中から、子どもたちがよく知っているものを演奏した。また、このコンサートではクラシックの作品が少ないが、サマータイムなどの夏らしい曲を筆者がヴァイオリンで演奏した。

後半は再び子どもたちがよく知っている夏のお化けの歌などを歌った。子どもが泣き出さない程度のお面などを付けると、さらに演出としては面白くなる。続いて「大人の海，親父の海」では、コンサートに来ている大人向けに、昔のポップスや演歌などを演奏した。スクールコンサートでは小学生の児童だけではなく、彼らの親，祖父母，曾祖父母，近所の大人，また児童の兄弟まで、幅広い世代が村の一大イベントとしてコンサートに集まってくださる。そのため幅広い世代に喜んでもらえるプログラム構成が必要となってくる。また「一緒に歌いましょう」では、そろそろ集中力も切れる頃に、子どもたちと一緒に歌ったり、掛け声に参加してもらおう工夫を行っている。演奏者が一方的に演奏を行うだけでなく、聴衆が聴く形式以外で音楽に参加することも、双方向的な活動の一步となる。

次の「発表！仲知小の皆さんの詩が歌になりました」は、今回のコンサートの一番のメインともいえる。予め、小学生が書いた詩を送っててもらい、その中から、歌になりそうなものを選んで、作曲家の河野久寿氏、及び演奏者が作曲を

行った。そしてコンサート当日、音楽が付いた詩を発表する。「仲知の波」は上五島の自然の風景とその思いが表現された歌である（文末の譜例参照）。この計画は閉校行事の一環として行われ、演奏者側と小学校側の双方向的な活動の一例となるプロジェクトであるといえる。

②時津北小学校の事例

同校は2009年から毎年2回（6月と11月）のペースでスクールコンサートを行っている（2012年度も継続して行われた）。すべてを挙げることはできないので、2010年6月に行ったコンサートを事例として取り上げる。コンサートが開催されたのは、同校の体育館、児童数は全校で約240名である。演奏者はピアノ、ヴァイオリン、クラリネット、ファゴット、ソプラノの5名で、長崎大学教育学部及び地元の大学で教鞭をとっている演奏者である。同校はいつも文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」を申請して、コンサートが行われている。プログラムは以下のとおりである。

オープニング

遠い夏の日のウタ

クラシックでご挨拶

～ショパン誕生200年プログラム～

別れの曲（クラリネット）

前奏曲第4番（ファゴット）

ノクターン作品9-2（ヴァイオリン）

幻想即興曲（ピアノ）

初夏の叙情曲をソプラノで

浜辺の歌（成田為三）

牧場の朝（文部省唱歌）

うみ（文部省唱歌）

みなさんと一緒に歌いましょう

うそ（宮川彬良）

やまのワルツ（湯山昭）

森のくまさん（アメリカ民謡）

僕にできること（宮川彬良）

休憩

ショウタイム

オリエンタルウインド（久石譲）

歌でめぐる世界の旅

日本：瞳を閉じて（荒井由美）

中国：草原情歌（中国民謡）

イタリア：海はまねく（イタリア民謡）

イギリス：ピクニック（イギリス民謡）

アメリカ：ワン（コーラスラインより）

日本：世界が一つになるまで（忍たま乱太郎より）

フィナーレ

チャルダッシュ（モンティ／古澤巖）

サメ（ピアソラ）

Keep on believing ～感動をくれた仲間たち～

（樽美寛）

コンサートの構成について説明する。まず「オープニング」であるが、演奏の前置きが長くなるとコンサートも盛り上がらない。まずは元気の良い曲で、いつも子どもたちを音楽の世界へ引き込む。この時は「遠い夏の日のウタ」であったが、「ともだち賛歌」の時も多い。

次に「クラシックでご挨拶」では、各自の楽器紹介を兼ねて、この年がショパンイヤーであったため、ショパンの作品を演奏した。ピアノ以外は編曲されたも

のであるが、親しみやすい曲や、テーマ性をもたせると、クラシックもとても聴きやすいものとなる。

次に「初夏の叙情曲をソプラノで」というコーナーでは、誰もが知っている「浜辺の歌」をソプラノで歌う。もちろん、オペラのアリアを歌っても良いと思うが、「牧場の朝」や「うみ」など小学校の教科書に載っている歌をきれいな声で歌うと、小学生は親しみを持ちながら、改めてきれいな声で歌うことの素晴らしさを発見するようである。

「みなさんと一緒に歌いましょう」では「山のワルツ」や「森のくまさん」のように、動物が登場し歌詞の内容もストーリー性があるため、小学生にもイメージしやすい。また「僕にできること」は前年、同小学校を訪問したときに、皆さんへのプレゼントとして演奏したもので、その後、同小学校で全学年がこの歌を練習し、愛唱歌となっている。この時は演奏者とともに、全校児童で合唱を行い、演奏者側と学校側の双方向的なつながりが生まれた瞬間であった。

休憩の後、緑茶のCMとして用いられている「オリエンタルウインド」を、衣装を変えて寸劇を交えて演奏した。他にも寸劇のレパートリーはいろいろあるが、小学生がいつも楽しみにしているコーナーである。

「歌でめぐる世界の旅」は、子どもたちに世界の音楽を断片的ではあるが、楽しく知ってもらう良い機会である。この中で、松任谷（荒井）由美氏の「瞳を閉じて」は、長崎県には所縁のある曲である。五島列島の中央に位置する奈留島の奈留高校の生徒が20年前、松任谷氏に校歌を作曲してほしいという手紙を書いて生まれた曲である。この曲は、当時はフォーク調であるからという理由で、校歌には採用されなかったものの、現在は愛唱歌として歌われている。

「フィナーレ」では再びクラシックを演奏する機会が多い。この日は、古澤巖氏の編曲によるモンティのチャルダッシュとピアソラの作品を演奏した。コンサートを全てクラシックの作品で構成すると、子どもたちも飽きてくるが、間に歌う活動を挟み込んで、子どもたちの興味を持続することができれば、最後まで集中して演奏を聴いてくれて、クラシックもまた新鮮な気持ちで聴いてくれる。最後の“Keep on believing”～感動をくれた仲間たち～は同校の校長先生が作詞作曲されたもので、あらかじめ楽譜を送ってもらい、当日いつものCD伴奏ではなく、楽器で児童の合唱に伴奏を付けてあげることで、会場との一体感が得られる。

児童の感想も様々であり、「最初に弾いたノクターン作品9-2がとてもキレイで印象に残りました」（6年女子）、「私は山のワルツを聴いて心がハッピーになりました。本当に山で歌っているみたいでわくわくしました！歌う声と楽器の音と一緒にになるととってもきれいですごいと思いました」（4年女子）、「私はサメという曲が面白いなあと思いました。本当にサメに追いかけているような、急いでいる感じがしました」（4年女子）、「僕にできることはいつもCDで歌っていたけれど、今日は生演奏で歌えて良かったです。あと世界の曲がたくさん聴けて楽しかったです」（6年女子）というように、曲のイメージや楽器の特徴をよく聴い

ている感想が多く、特にみんなで合唱できて良かったという感想は多く見られた。

③スクールコンサートからの発展

スクールコンサートで訪問した同年10月、今度は時津北小学校の4年生65名が長崎大学を訪れて、大学で交流会を行った。この交流会は同校の校長先生による発案によるもので、事前に4年生の担任2名、長崎大学教育学部の教員、交流会のお手伝いをする学生が話し合いの場を持ち、以下の要領で開催されることになった。交流会の概要は以下のとおりである。(なお、この交流会は2011年度、2012年度も同様の要領で継続して行われている。本報告では2010年度の交流会を中心に述べる)

- ・開会式
- ・キャンパス見学(10班に分かれて)
- ・大学の講義体験 Part 1 (10班に分かれて講義を受ける)
- ・昼食交流(児童一人500円の予算で大学の食堂を体験する)
- ・大学の講義体験 Part II (合唱の指導)
- ・音楽交流会(児童と大学生による)
- ・交流会のまとめと閉会式

主に受け入れの中心となっているのは、長崎大学教育学部の音楽専攻であるが、他の専攻にも協力を要請した。その結果、大学の講義体験 Part I では、音楽だけでなく様々な分野の講義が用意され、子どもたちの様々な興味、関心に応える形となった。講義は以下のとおりである。

2010年度	2011年度	2012年度
パズルをといてみよう(数学)	数とパズルの世界(数学)	空飛ぶタネの仕組み(理科)
漂着ゴミの中から見つけよう(理科)	望遠鏡をのぞいてみよう(理科)	太陽系の惑星とは(理科)
望遠鏡をのぞいてみよう(理科)	音楽アンサンブルを楽しもう(音楽)	リコーダー名人になろう(音楽)
ヴァイオリン入門(音楽)		ヴァイオリンを弾いてみよう(音楽)
リコーダーアンサンブル(音楽)	写真を使ったアート(美術)	ネイルアート(美術)
アートすると!(美術)	ザリガニロボットを作ろう(技術)	先生になったつもりボール運動(体育)
ザリガニロボットを作ろう(技術)	運動がうまくなる秘密(体育)	ストレスってなに?(保健)
運動が上手にできるわけ(体育)		
3次元カメラを触ってみる(情報)		
キーボードでアンサンブルしよう(音楽)		

児童たちは、いつもの環境とは異なる大学を訪れて、その広さに驚き走り回ってキャンパスを巡っていた。また小学生の各班に大学生が一人ずつアシスタントとして付き、教育学部で学ぶ大学生としても大変貴重な体験ができた。交流会のまとめである音楽交流会では、音楽専攻の学生による演奏、子どもたちが準備してきたリコーダー演奏や、大学の講義体験 PartⅡで指導を受けた合唱曲を発表し、最後は愛唱歌である「僕にできること」を全員で合唱した。音楽を中心としながら様々な分野の体験学習へと発展し、小学校と大学の双方向的な交流活動が可能となった事例である。

3. まとめ

本報告では2つの事例から、スクールコンサートの実践例、そしてスクールコンサートから発展できる可能性のある交流活動について述べてきた。

スクールコンサートそのものでは、子どもたちのよく知っている曲や歌う活動を織り交ぜながらクラシックを聴かせると、めりはりのきいたコンサートになる。そして、コンサートの中で、「一緒に歌ったり共演したりする活動を入れる」、「あらかじめ合唱曲をプレゼントしておいて一緒に演奏する」、「学校側からリクエストされた曲を演奏する」、「児童の詩に曲をつけてプレゼントする」といった活動は、演奏者と学校の双方向的な活動と交流を活発にし、さらに大学訪問など、児童の全人的な教育へ寄与できる活動へと発展する可能性があるといえる。

4. おわりに

最近、小、中学校でのいじめ問題が頻発し、昔よりも一層悪質で悲惨な状況になっていることに胸が痛む。芸術は心や情操を豊かにするといわれ、科学的に立証することは難しいが、少なくとも幼い頃に芸術に触れること、そして歌ったり、音楽を奏でる喜びを体験できた子ども、そして音楽で溢れている学校では、いじめ問題は全く起こらないとは言い切れないが、少なくなるのではないかと筆者は感じている。

我々演奏家は一人でも多くの人、一校でも多く音楽を届けにいきたいと考えている。しかし文化庁の「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」はあまり周知されていないうえに、音楽鑑賞を要請する学校に対して、申請書を書くなどの手間がかかり、忙しい学校の教諭にとってかなりの負担になっている。そして一生懸命申請書を提出しても落選する場合があります、申請書を出した意識の高い学校では、ぜひ何らかの形でコンサートを実現させたいものである。

現在、学校の音楽の授業は子どもたちが音楽と十分触れ合うには少なすぎるので、学校の音楽教育に加えて、もっと質の高い演奏を頻繁に聴いたり、楽器の体験や指導を受けたりする活動が増えて、それが当たり前の状況にならないと思う。全国すべての幼稚園、保育園、小、中、高等学校でこのような音楽鑑賞の時間が制度的に設けられても良いのではないだろうか。また、本報告の

ようにスクールコンサートがきっかけとなって大学と小学校との交流活動が実現することもある。このような子どもたちを全人的な観点から育てていく地域貢献活動は、今まさに教育学部に求められている役割の一つではないだろうかと思う。

【注】

1) eプログレッシブ英和中辞典（インターネット）

<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?p=outreach&stype=0&dc>

英和辞典では、語源について文中に引用したように掲載されているが、最近では医療や介護等、音楽以外の幅広い分野においてもアウトリーチという言葉は用いられているため、以後、学校への訪問コンサートを「スクールコンサート」と呼ぶことにする。

2) 海フェスタは「海の日」を中心として約1週間、記念式典、体験航海、マリンスポーツ、コンサートが開催されるイベント。2010年は、長崎市、五島市、上五島町で開催された。

【引用・参考文献】

「仲知の波」（2011）ながさき音楽祭「長崎の唄・長崎の音」楽譜集，長崎県，長崎文化団体協議会，pp.36-37

拙著（2006）「教室コンサートの実施報告及びアンケート調査にみるその成果について」『教育実践総合センター紀要』第5号，pp.145-154

拙著（2010）「企業メセナと音楽教育—スクールコンサートを事例として—」『企業メセナの理論と実践』菅家正瑞監修，佐藤正治編，水曜社，pp.276-284

【謝辞】

2010年度から始められた長崎大学と時津北小学校との交流活動も、お陰様で3年間継続することが出来ました。その間、数学、理科、体育、情報、美術、技術、保健の先生方、ならびにご協力頂きました先生方には、大変お忙しい中ご尽力頂きましたことを感謝いたしております。厚く御礼申し上げます。

仲知の波

作詞／仲知小 五年 山口 智仁
作曲／河野 久寿

♩=100

1
Is

6
mf はまへに たつ

11
と さざなみのおと きょうかいのかね

15
のおと きが こそこそは なしきするこえ

16

19
Vox. *f* ちゅう ちに うまれ しぜんにしたしみながら

21
Vox. そだつ てい く *mp* ちゅう ちに うまれて よかつ た

23
Pno. *f*

28
Vox.

28
Pno. *mf*

31
Vox.

33
Pno. *mp*

仲知の波

作詞／仲知小 五年 山口智仁

浜辺に立つと
さざ波の音
教会のかねの音
木がこそこそ話をする声
仲知に生まれ
自然に親しみながら
育っていく
仲知に生まれてよかった